

TST (20 答法) における二つの反応様式について

高 垣 忠 一 郎

I 問題と目的

(1) T. S. T. の性格について

Kuhn(1954) らによってはじめられた T. S. T. ("Twenty Statements" Test) の原法は, "Who Am I" 「私は誰だろうか」という質問を被験者自身が自分自身に問いかけることによって, 頭に浮んでくることを順次 20 個 記述するものである。

この原法の質問形式の特徴は, 反応を方向づけない non-directed なあるいは Non-focus な性質にあるとされている。それゆえ, 反応としては実にさまざまな種類の記述が出現する。こうした原法のもつ性質は, "Who Am I" 「私は誰だろうか」という質問様式を他の様式に変えることによって, 生じる反応が一定の方向に方向づけられるということを明らかにした研究によって証明されてきている。例えば菊池(1970)は質問様式を「あなたは自分自身をどんな人だと思っていますか」とすることによって, 「私は誰だろうか」という質問様式では 20~30% 出現した社会的記述がほとんど出現しなくなり, 逆に性格等, 心的側面に関する記述が 2 倍近くに増大することを明らかにしている。このような結果は, 「どんな人が」という質問様式が, 自己の内面の状態や自己の傾向に関する内省をうながすような志向性をもつために生じると考えられた。

T. S. T. の反応分析の際には, こうした non-directed な特徴を生かす方法が工夫されねばならない。

(2) 反応分析の方法

T. S. T. の 20 個の反応を決定する第一の要因は, 課題の教示及び「私は誰だろうか」という質問のもつ性格からくるものである。20 個の記述を提示するということは, 被験者にとって, 無数に存在する自己の諸側面に関する事項の中から, 20 個の事項を選択することを意味する。しかるに, T. S. T. の教示及び質問は, 前述のごとく性格をもち, 選択の基準, 方向性は示されていない。したがって, 被験者の自己に対する構えあるいは態度が反応を選択する基準乃至方向性を与えることになる。すなわち, 被験者の自己に対する構え, 態度が, 彼がどのような反応をするかを決定する主要な要因となる。そこで, T. S. T. の反応を分析する際には, どういう形で, この自己に対する構え乃至態度をあらわにさせるかという点が問題になる。ここではまず実際の反応分析の手続きを考慮において, 自己

に対する構えを 2 つの側面に分けて考えたい。すなわち, 自己の「何」をみようとする傾向があるかという側面と, 自己を「どのように」見ようとする傾向があるかという側面を, 構えを構成する 2 側面として考える。

そうすると, 反応分析に際して前者は 20 個の反応内容が主に自己の諸側面のうちのどの側面を多く記述しているかという点から分析され, 後者は, 主観による評価を媒介にした反応内容が多いか少ないかという点から分析される。

ところで, これまでに反応分析のために主にとられてきた方法は, 反応を, それが自己の諸側面のうちのどの側面について記述しているかによって, いくつかのカテゴリーに分類することであった。それは自己の「何」をみる傾向があるかという側面から自己に対する構えを測ろうとする方法であるといえる。

本研究では視点をえて, 自己を「どのように」みる傾向があるかという側面から構えをとらえ, こうした構えが何によって規定されているかを探索することを目的とした。

そのために具体的には, 反応を主観による評価を媒介にした記述であるかそうでないかによって 2 つのカテゴリーに分類し, 第 1 に両カテゴリーに属する反応が一般に被験者にとってどんな意味をもっているのか, 第 2 に両カテゴリーに属する反応数の相対的な比重のことなる(すなわち反応様式のことなる)被験者群を抽出し, 両群の反応のもつ意味にどのようなちがいがあるか。第 3 に T. S. T. とはことなるもうひとつの課題を与え(方法のところを参照) それに対する反応様式と T. S. T. への反応様式との関係を見ることによって上記の目的にせまる。

II 方 法

(1) 調査実施時期 1974 年 6 月

(2) 調査対象 大阪音楽大学音楽専攻科 1 回生。女子 152 名。なお結果の分析に供した資料は調査項目を完全にやり終えた者の中からランダムに抽出された 100 名の資料である。

(3) 調査手続き

(a) T. S. T.

教示は, 国際基督教大学教育研究所教育心理研究室(1961)に従い, 以下のとおりである。「下の 1 から 20

までのそれぞれの線のうえに『私は誰だろうか』という問に対して、頭に浮んできたことを、20通りのちがった文章にまとめて下さい。この質問は、あなたが自身に問いているもので、他の人からの、あるいは他の人への問ではありません。そのつもりで頭に浮んできた順にりくつや大切さをぬきにして、1から20までの空欄に一つずつ違ったことを書いて下さい。時間が限られているので、『はじめ』のあいずがあつたら、なるべく手ばやくかたずけて下さい。質問があつたら手をあげて係の人がそばへ来てからして下さい。いったん書いた文字を消すには、消しゴムを使わず鉛筆で文字の上に2・3本横線を引くだけでよい。」

T. S. T. への回答が終了したものから順次手をあげさせ、次の附加的質問を記した質問用紙を配り、順次記入させる。

(b) 附加的質問

これは、各反応が被験者にとってどのような意味乃至性格をもっているかを問うものであり、今回は、1. 明瞭度（どの程度ハッキリしているか） 2. 意識度（どの程度意識するか） 3. 中心度（自己イメージにどの程度ウエイトをけているか） 4. 重要度（どの程度大切であるか） 5. 好悪度（どの程度気に入っているかあるいはいやであるか）を問うた。質問内容は以下のとうりである。

1. 20個の各項目はそれぞれどのくらい明確にそうであるといえますか。20個の各項目をもれなく以下のイ～ホの5段階に分類し（ ）内に各項目の番号を記入して下さい。

- イ. はっきりそうだとはいえる（ ）
- ロ. かなりはっきりそうだとはいえる（ ）
- ハ. まあそうだとはいえる（ ）
- ニ. かなりあいまいな（ ）
- ホ. まったくあいまいな（ ）

2. 20個の各項目はそれぞれどのくらいよく意識しますか。20個の各項目をもれなく以下のイ～ホの5段階に分類し（ ）内に各項目の番号を記入して下さい。

- イ. よく意識する（ ）
- ロ. かなりよく意識する（ ）
- ハ. 少し意識する（ ）
- ニ. ほとんど意識しない（ ）
- ホ. まったく意識しない（ ）

3. 20個の各項目は、よいにしろわるいにしろ、現在の「あなたらしさ」を形づくるうえでどの程度のウエイトをけているのでしょうか。各項目について適当と思う欄に○印を記入して下さい。

各項目について「非常に」「かなり」「少し」ウエイト

をしめている、「あまり」「ほとんど」「ぜんぜん」ウエイトをしめていないの6段階評定。

4. 20個の各項目は、あなたにとってどの程度大切な意味をもっているのでしょうか。各項目について適当と思う欄に○印を記入して下さい。

各項目について「非常に」「かなり」「少し」大切、「やや」「かなり」「まったく」どうでもよいの6段階評定。

5. 20個の各項目は、あなたにとってどの程度気に入っているのでしょうか。各項目について適当と思う欄に○印を記入して下さい。「非常に」「かなり」「少し」気に入っている、「すこし」「かなり」「非常に」いやであるの6段階評定。

(c) 無意味図形に対するSD法

附加的質問への回答が終了したものから順次手をあげさせ、以下のような4つの無意味図形及び15の形容詞対を記したテスト用紙を与え、7段階評定させる。指示は「以下の4つの図形をみてどんな感じがするか。15の形容詞対の各欄の適当なところにもれなく○印記入して下さい」である。

1. 無意味図形



以上の図形は Vanderplas, et. al. (1959) の作成した無意味図形の中から選ばれた、角数はいずれも16で、連想値(%)はそれぞれ、22, 32, 42, 52, である。

2. 形容詞対

まとまった — ばらばらの、かるい — おもい
つめたい — あたたかい、あかるい — くらい
ふるい — あたらしい、かわいた — しめった
かっぱつな — ふかっぱつな、じみな — はでな
ゆるんだ — はりつめた、にぶい — すどい
ゆたかな — ひんじゃくな、あさい — ふかい
さわがしい — しずかな、よわい — つよい
かたい — やわらかい

以上の形容詞は村上(1973)より選ばれた。

なおこの課題は、被験者の7段階評定が中央にむかう傾向があるか、極端方向にむかう傾向があるかによって被験者の反応様式を把握するために設定された。

Ⅲ 結 果

(I) 反応の分類

A 反応：主観による評価を媒介にしない記述を内容

とする反応……例えば「母親の胎内から生まれた」「思考や感情をもつ」等の人間一般に妥当する事柄の記述、「阪急電車通っている」「ノッポというあだ名がある」「女性である」「学生である」等の自己に関する客観的な事柄の記述を含む。

B反応：主観による評価を媒介にした記述を内容とする反応……身体的特徴、性格、能力、好み、願望、欲求などの心的特徴、対人的社会的特徴等についての評価を内容とする記述を含む。

(2) 被験者の分類

100名の被験者をB反応の最も多い者から50名(A反応の最も少ない者から50名)、少ない者から50名(多い者から50名)の2群に分け、前者をB反応上位群(以下略して上位群)、後者をB反応下位群(以下略して下位群)とする。

両群のB反応数の平均値及び分散は表1のとおりである。

表1 B反応上位群と下位群におけるB反応数の平均値と分散

上位群	平均値	16.34	分散	1.84
下位群	平均値	9.04	分散	3.21

なお、両群のB反応数平均値間には1%水準で有意差あり(T検定)

(3) A・B両反応における附加的質問の評定傾向の比較

A反応、B反応に各々属する反応が、明瞭度、意識度、中心度、重要度、好悪度において、各々どのような評定をうけているかを比較したものが表2、表3である。

表2 明瞭度、意識度の各評定段階に属するA、B両反応の数

明瞭度		はっきりそう だといえる	かなりはっきり そうだといえる	まあそうだ といえる	かなりあ いまいな	まったくあ いまいな
	A反応	564 (76.8)	116 (15.8)	34 (4.6)	10 (1.4)	10 (1.4)
意識度	B反応	310 (24.5)	398 (31.4)	396 (31.3)	125 (9.9)	37 (2.9)
		よく意識する	かなりよく意識する	少し意識する	ほとんど意識しない	まったく意識しない
意識度	A反応	109 (14.8)	116 (15.8)	185 (25.2)	192 (26.2)	132 (18.0)
	B反応	231 (18.3)	355 (28.0)	382 (30.2)	212 (16.7)	86 (6.8)

()内の数値は% A反応 N=734 B反応 N=1,266

表3 中心度、重要度、好悪度の各評定段階に属するA、B両反応の数

中心度		非常にウエイト をしめている	かなりウエイト をしめている	少しウエイト をしめている	あまりウエイト をしめていない	ほとんどウエイト をしめていない	ぜんぜんウエイト をしめていない
	A反応	103 (14.0)	141 (19.2)	148 (20.2)	117 (16.0)	122 (16.6)	103 (14.0)
重要度	B反応	181 (14.3)	324 (25.0)	378 (29.8)	198 (15.6)	121 (9.6)	64 (5.1)
		非常にたいせつ	かなりたいせつ	すこしいたいせつ	ややどう でもよい	かなりどう でもよい	まったくど うでもよい
好悪度	A反応	170 (23.2)	138 (18.8)	163 (22.2)	101 (13.8)	76 (10.3)	86 (11.7)
	B反応	201 (15.9)	336 (26.5)	347 (27.4)	202 (16.0)	89 (7.0)	91 (7.2)
好悪度		非常に気に入っている	かなり気に入っている	すこし気に入っている	すこしい やである	かなりい やである	非常にい やである
	A反応	144 (19.6)	162 (22.1)	267 (36.4)	118 (16.1)	22 (3.0)	21 (2.8)
	B反応	157 (12.4)	192 (15.2)	265 (20.9)	321 (25.4)	189 (14.9)	142 (11.2)

()内の数値は% A反応 N=734 B反応 N=1,266

表2より明瞭度について「かなりはっきりそうだとはいえる」以上の評定をうけた反応数とそれ以外の評定をうけた反応数との割合を比較すると、A反応の方がB反応よりも前者の割合が有意に高い($\chi^2=294.983$ 1%水準)。もっともこれは、A反応のそもそもの性格が主観の評価を媒介にしない客観的事項を記述内容としていることから当然予想される結果であり、A反応の76.8%が「はっきりそうだとはいえる」に集中していることにもそのことが反映している。

同様に意識度について「かなりよく意識する」以上の評定をうけた反応数とそれ以外の評定をうけた反応数とを比較すれば、B反応の方がA反応よりも前者の割合が有意に高い($\chi^2=47.106$ 1%水準)。

又表3より、中心度について「少しウエイトをめている」以上の評定をうけた反応数とそれ以外の評定をうけた反応数を比較すると、B反応の方がA反応よりも前者の割合が有意に高い($\chi^2=53.689$ 1%水準)。

同様に重要度について「すこしたいせつ」以上の評定をうけた反応数とそれ以外の評定をうけた反応数を比較すると、B反応の方がA反応よりも前者の割合が有意に高い($\chi^2=6.805$ 1%水準)。しかしながら「非常にたいせつ」の評定をうけた反応の割合はA反応の方が有意に高い($\chi^2=16.316$ 1%水準)。

好悪度について「気に入っている」方向に評定をうけた反応数と「いやである」方向に評定をうけた反応数を比較すれば、A反応の方が「気に入っている」反応の割合が有意に高い($\chi^2=168.348$ 1%水準)。又A反応は「気に入っている」反応の割合が「いやである」反応の割合よりも有意に高く($\chi^2=125.516$ 1%水準)。逆にB反応は有意ではないが反対の傾向がある。

さらに、単に「気に入っている」あるいは「いやである」

という方向だけでなく、その度合を考慮に入れてみれば、positiveな評定をうけた反応においては、A、B両反応間に差はないが、negativeな評定をうけた反応においてはB反応の方がA反応よりも「非常にいやである」と「かなりいやである」に属する反応の割合が有意に高い($\chi^2=30.087$ 1%水準)。すなわち、B反応はA反応よりも、情動価のより高いnegativeな反応が多い。

以上の結果をもう一度まとめれば、B反応はA反応に比して、明瞭度が低く、意識度、中心度、重要度が高く(ただし最も重要度の高い反応はA反応の方に多い)、negativeな感情をおびる傾向が強いといえよう。

(4) 上位群と下位群のA反応における附加的質問の評定傾向の比較

上位群、下位群各々のA反応に属する反応が、明瞭度、意識度、中心度、重要度、好悪度において、どのような評定をうけたかを比較したものが、表4、表5である。

表より、上位群と下位群のA反応の間には各評定傾向にほとんど差がみられないことがわかる。ただ明瞭度において、上位群のA反応の方が下位群のそれよりも「はっきりそうだとはいえる」反応数の割合が有意に高い($\chi^2=10.198$ 1%水準)という差がみられる程度である。A反応は客観的には「はっきりそうだとはいえる」反応であるはずだが、反応した本人にとっては必ずしもそうとはいえないものが含まれており、下位群のA反応の中には上位群のA反応よりもそうした反応が多く含まれていることを示している。

(5) 上位群と下位群のB反応における附加的質問の評定傾向の比較

上位群と下位群各々のB反応に属する反応が、明瞭度、意識度、中心度、重要度、好悪度においてどのような評定をうけたかを比較したものが表6、表7である。

表4 上位群と下位群における明瞭度、意識度の各評定段階に属するA反応の数

明瞭度		はっきりそう だといえる	かなりはっきり そうだといえる	まあそうだ といえる	かなりあいまい	まったく あいまい
意識度	上位群	158 (85.4)	24 (13.0)	3 (1.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
	下位群	406 (74.1)	92 (16.8)	31 (5.6)	10 (1.8)	10 (1.8)
意識度		よく意識する	かなりよく 意識する	少し意識する	ほとんど意 識しない	まったく意 識しない
明瞭度	上位群	30 (16.2)	27 (14.6)	43 (23.2)	59 (31.9)	26 (14.1)
	下位群	79 (14.4)	89 (16.2)	142 (25.9)	133 (24.2)	106 (19.3)

()内の数値は% 上位群のA反応 N=185 下位群のA反応 N=549

表5 上位群と下位群における中心度、重要度、好悪度の各評定段階に属するA反応の数

中心度		非常にウエイトを しめている	かなりウエイトを しめている	少しウエイトを しめている	あまりウエイトを しめていない	ほとんどウエイトを しめていない	ぜんぜんウエイトを しめていない
	上位群 下位群	29 (15.7) 74 (13.5)	39 (21.1) 102 (18.6)	40 (21.6) 108 (19.7)	22 (11.8) 95 (17.3)	31 (16.8) 91 (16.5)	24 (13.0) 79 (14.4)
重要度		非常にたいせつ	かなりたいせつ	すこしいたいせつ	ややどう でもよい	かなりどう でもよい	まったくどう でもよい
	上位群 下位群	42 (22.7) 128 (23.3)	35 (18.9) 103 (18.8)	42 (22.7) 121 (22.0)	23 (12.4) 78 (14.2)	16 (8.7) 60 (10.9)	27 (14.6) 59 (10.8)
好悪度		非常に気に入っている	かなり気に入っている	すこし気に入っている	すこしいやである	かなりい やである	非常にい やである
	上位群 下位群	35 (18.9) 109 (19.8)	44 (23.8) 118 (21.5)	64 (34.6) 203 (37.0)	30 (16.2) 88 (16.0)	4 (2.2) 18 (3.3)	8 (4.3) 13 (2.4)

()内の数値は% 上位群のA反応 N=185 下位群のA反応 N=549

表6 上位群と下位群における明瞭度、意識度の各評定段階に属するB反応の数

明瞭度		はっきりそう だといえる	かなりはっきり そうだといえる	まあそうだ といえる	かなりあいまい	まったく あいまい
	上位群 下位群	233 (28.6) 77 (17.1)	230 (28.2) 168 (37.3)	256 (31.4) 140 (31.0)	74 (9.1) 51 (11.3)	22 (2.7) 15 (3.3)
意識度		よく意識する	かなりよく 意識する	少し意識する	ほとんど意 識しない	まったく意 識しない
	上位群 下位群	170 (20.9) 61 (13.5)	215 (26.4) 140 (31.1)	233 (28.6) 149 (33.0)	143 (17.5) 69 (15.3)	54 (6.6) 32 (7.1)

()内の数値は% 上位群B反応 N=815 下位群B反応 N=451

表7 上位群と下位群における中心度、重要度、好悪度の各評定段階に属するB反応の数

中心度		非常にウエイトを しめている	かなりウエイトを しめている	少しウエイトを しめている	あまりウエイトを しめていない	ほとんどウエイトを しめていない	ぜんぜんウエイトを しめていない
	上位群 下位群	130 (15.9) 51 (11.3)	203 (24.9) 121 (26.8)	229 (28.1) 149 (33.0)	135 (16.6) 63 (14.0)	80 (9.8) 41 (9.1)	38 (4.7) 26 (5.8)
重要度		非常にたいせつ	かなりたいせつ	すこしいたいせつ	ややどう でもよい	かなりどう でもよい	まったくどう でもよい
	上位群 下位群	134 (16.4) 67 (14.9)	211 (25.9) 125 (27.7)	217 (26.6) 130 (28.8)	129 (15.8) 73 (16.2)	64 (7.9) 25 (5.5)	60 (7.4) 31 (6.9)
好悪度		非常に気に入っている	かなり気に入っている	少し気に入っている	すこしい やである	かなりい やである	非常にい やである
	上位群 下位群	83 (10.2) 74 (16.4)	101 (12.4) 91 (20.2)	165 (20.2) 100 (22.2)	215 (26.4) 106 (23.5)	143 (17.5) 46 (10.2)	108 (13.3) 34 (7.5)

()内の数値% 上位群B反応 N=815 下位群B反応 N=451

表6より明瞭度についてみれば、上位群のB反応は下位群のそれよりも「はっきりそうだといえる」反応の割合が有意に高く ($\chi^2=20.823$ 1%水準)、下位群の方は「かなりはっきりそうだといえる」反応の割合が上位群より有意に高い ($\chi^2=10.983$ 1%水準)。

同様に意識度についてみれば、上位群のB反応は下位群のそれよりも「よく意識する」反応の割合が有意に高い ($\chi^2=10.468$ 1%水準)。

表7より中心度、重要度については、有意な差はみられない。

好悪度についてみれば、上位群と下位群との間に、positiveな評定をうけた反応と negativeな評定をうけた反応の割合において有意な差がある ($\chi^2=29.520$ 1%水準)。しかも、上位群では positiveな評定をうけた反応よりも、negativeな評定をうけた反応の割合が有意に高

く ($\chi^2=8.442$ 1%水準)。逆に下位群では negativeな評定をうけた反応よりも、positiveな評定をうけた反応の割合が有意に高い ($\chi^2=6.973$ 1%水準)。

以上の結果をもう一度まとめると、上位群のB反応は、下位群のそれよりも明瞭度の最も高い反応、意識度の最も高い反応が多く、negativeな感情をおびた反応が多いといえよう。

(6) 被験者ごとのB反応数と附加的質問の評定傾向との関係

これまでは、反応単位に分析をおこなってきたが、ここでは被験者を単位に、B反応数と、20個の反応全体としての、明瞭度、意識度、中心度、重要度、好悪度との間にそれぞれどのような関係があるかを分析する。

そのための手続きとして、各被験者の評定傾向を数量化するために、下表のごとく評定段階に得点を与える。

	2 点	1 点	0 点	-1 点	-2 点
明瞭度	はっきりそう だといえる	かなりはっきり そうだといえる	まあそうだ といえる	かなりあいまい	まったく あいまい
意識度	よく意識する	かなりよく 意識する	少し意識する	ほとんど意 識しない	まったく意 識しない

	3 点	2 点	1 点	-1 点	-2 点	-3 点
中心度	非常にウエイト をめている	かなりウエイト をめている	少しウエイト をめている	あまりウエイト をしていない	ほとんどウエイト をしていない	ぜんぜんウエイト をしていない
重要度	非常にたいせつ	かなりたいせつ	少したいせつ	ややどう でもよい	かなりどう でもよい	まったくど うでもよい

	3 点	2 点	1 点		1 点	2 点	3 点
好度	非常に気に入 っている	かなり気に入 っている	少し気に入 っている	悪度	少しいや である	かなりい やである	非常にい やである

上表のような得点法にもとずき、被験者ごとに20個の反応の得点を合計したものを、それぞれ被験者の明瞭度得点、意識度得点、中心度得点、重要度得点、好度得点、悪度得点とすると(ただし、好度得点と悪度得点は、該当する評定をうけた反応の合計得点である。ゆえに必ずしも20

個の反応の合計得点とはならない)。

B反応数と、明瞭度得点、意識度得点、中心度得点、重要度得点、好度得点、悪度得点との各相関係数を算定すると表8に示すごとくであった。(ピアソン)

表8 B反応数と各評定得点との相関係数

	明瞭度得点	意識度得点	中心度得点	重要度得点	好度得点	悪度得点
B反応数	-.247※	.277※※	.178	.023	-.322※※	.433※※

※ 5%水準 ※※ 1%水準

特に、B反応数と悪度得点との間にかなりの相関関係がみられる。

次に、B反応数の上位群と下位群とにおける、明瞭度得

点、意識度得点、中心度得点、重要度得点、好度得点、悪度得点の各得点の平均値を比較すると表9に示すごとくであった。

表9 上位群と下位群における各評定得点の平均値と分散

	明瞭度得点		意識度得点		中心度得点		重要度得点		好度得点		悪度得点	
	$\bar{x}$	SD	$\bar{x}$	SD	$\bar{x}$	SD	$\bar{x}$	SD	$\bar{x}$	SD	$\bar{x}$	SD
上位群	18.4	7.84	5.6	8.80	13.3	15.50	14.1	16.18	17.6	9.16	17.6	9.48
下位群	22.3	7.90	0.6	10.55	7.1	15.96	14.1	17.82	25.3	11.15	9.4	5.77
平均値の差	3.9		5.0		6.2		0.0		7.7※※		8.2※※	

※※ 1%水準 (T検定)

好度得点と悪度得点において両群に差がみられる。

以上の結果をまとめれば、B反応を多く出す傾向と、negative な自己感情をもつ度合の間にはプラスの相関関係があり、逆に positive な自己感情をもつ度合とはマイナスの相関関係があるといえる。

(7) B反応上位群と下位群における無意味図形に対するSD法による評定傾向の比較

岩脇(1973)は、評定尺度法など多くの選択肢を含む尺度に対して回答する場合、ある回答者は尺度の中央部にある選択肢よりも両極にある選択肢を多く利用するし、ある回答者は中央の選択肢を多く使用するという事実が存在することを指摘し、極端な位置にある選択肢を用いやすい傾向を、極端な応答の構え("extreme response set"略称 E. R. S.)として、それと回答者のもつ準拠枠、パーソナリティ特性、動機づけ等との関係を明らかにしようとした研究を展望している。

それによれば、一般に刺激(項目)が被験者によってよく知られている、あるいは有意義なものであるほど、応答は分極し、極端な評定があらわれやすく、無意味な刺激であるほど応答が分化せず中央の選択肢への評定が増すことしかし被験者によっては、無意味な刺激であっても、極端な選択肢を選ぶ傾向がみられ、こうした無意味な刺激への応答に際して被験者自身のもつ構えが投影されやすいこと、E. R. S. とパーソナリティとの関係では、不安の高い人、神経症的傾向の強い人の方が正常者よりも E. R. S. が強いこと等が明らかにされている。

ここでは上記のような知見にもとづき、B反応上位群と下位群との間で、無意味図形に対する評定傾向にどのような差があるかを分析する。

上位群と下位群とで「どちらでもない」「やや」「かなり」「非常に」の各選択肢を選んだ度数を比較したものが表10である。

表10 上位群、下位群における無意味図形に対する各評定度数

	どちらでもない	やや	かなり	非常に	計
上位群	636 (21.2)	1147 (38.2)	816 (27.2)	401 (13.4)	3,000 (100.0)
下位群	645 (21.5)	1357 (45.2)	734 (24.5)	264 (8.8)	3,000 (100.0)

()内の数値は%

表10より「非常に」の選択肢を選んだ度数とその他の選択肢の度数の割合を両群で比較すれば、上位群の方が前者の割合が有意に高い($\chi^2=31.742$ 1%水準)。又「かなり」の選択肢を選んだ度数についても同様に比較すれば、上位群の方が有意に高い($\chi^2=5.849$ 5%水準)。「やや」の選択肢を選んだ度数の割合を比較すれば、下位群の

方が有意に高い($\chi^2=30.226$ 1%水準)。

以上の結果は、上位群の方が、極端な選択肢を選ぶ傾向が強いことを示している。

Ⅳ 考 察

反応に対する附加的質問の結果は、主観の評価を媒介に

しないA反応と主観による評価を媒介にしたB反応とを比較すれば、B反応の方が、一般的にみて被験者にとって、自己イメージの構成に重いウェイトを占め、よく意識され、否定的な感情をおびている傾向が強く、A反応は肯定的な感情を与えられる傾向が強いということを示した。これは、被験者の区別をぬきにしたA反応、B反応のもつ一般的な傾向を示すものである。

しかし、B反応を多く出す被験者群とB反応が相対的に少ない被験者群とで、こうしたA反応、B反応のもつ意味がやはり同じであるかを問題にした場合、結果はA反応においては差がみられないが、B反応では特に情緒的な意味において大きな差異が存在することを示した。B反応を多く出す群のB反応は否定的な感情をおびた反応が多く、逆にB反応が相対的に少ない群のB反応は肯定的な感情をむけられた反応が多い、という差が存在する。すなわち、B反応が相対的に少ない被験者達はA反応、B反応にかかわらず肯定的な感情をもつ傾向があるが、B反応の多い被験者たちは、A反応には肯定的でも、B反応に対しては否定的な感情をもっている傾向がある。こうした傾向がはっきりと存在することは、被験者のB反応数と、反応の否定的感情度とにはプラスの相関関係があり、肯定的感情度との間にはマイナスの相関関係があるという結果からも支持される。

さて、B反応の多い被験者と少ない被験者の間にみられる特に大きな差違が、B反応にむけられた感情のちがいにあことは、B反応を多く出す傾向が、A反応よりもむしろB反応の荷負う情緒的な意味と強く関係していることを示している。そしてこのことは、B反応が主観による評価を媒介にした反応であることを考えれば、主観による自己に対する評価が肯定的な感情をおびているか、否定的な感情をおびているかが、主観の評価を媒介にした反応の出現度を決定する要因であることを示唆する。すなわち、主観の評価を媒介にした反応を多く出す傾向は、自己に対する否定的な感情を荷負った評価態度から生じること示唆する。

さて、それでは無意味図形に対する反応に際して、B反応の多い被験者群は、その少ない被験者群よりも極端な応答傾向が強いという結果はどのように解釈されるだろうか。

先に述べたように、極端な応答の構えは、神経症的傾向や不安、不適応と相関があることがすでに明らかにされている。しかるに、神経症者や不安の高い人、不適応傾向のある人は情緒的な不安定傾向、情緒的緊張が高いという事実を考えるならば、上記の結果は、B反応を多く出す傾向の背後に、自己への否定的な感情を荷負う評価態度を予想することを支持するといえよう。

参 考 文 献

- 岩脇 三良：心理検査における反応の心理 日本文化科学社 1973。
菊池登紀子：青年期における自己観〔I〕—私立女子校生における発達の様相—，岩手大学教育学部研究年報，1970
30，4，57—74。
国際基督教大学教育研究所教育心理研究室編：二十答法による自己態度の研究手引，1961。
Kuhn, M. H. & Mcpartland, T. S.: An empirical investigation of self-attitudes. Amer. sociol. Rev.,
1954, 19, 68—76。
村上 宣寛：セマンティック・ディファレンシャル法についての一実験的研究，心理学研究，1973，44，4，179—
185。
Vanderplas, J. M. & Garvin, E. A.: The association value of random shapes. J. exp. Psychol., 1959,
57, 3, 147—154。